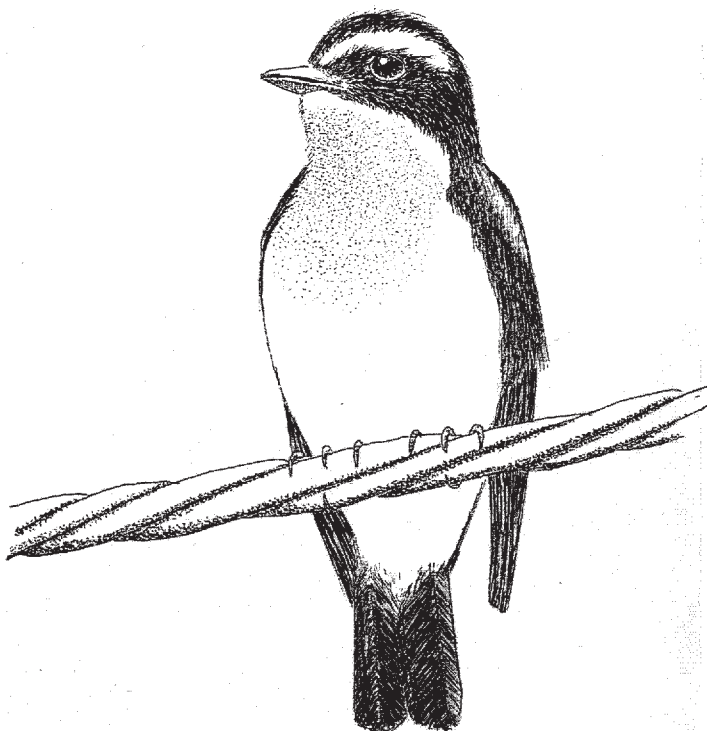


はり まん たん けん
播 磨 探 検

2017.6.2 273号

えん 赤松 弘一

5月12日朝、鳥のさえずりで目覚めた。「なんとも優雅で清々しい朝ではないか!」と起きだした。鳥が鳴かなくとも、いつも通り習慣で目覚めは早いのだが…。新聞を読んでいる間も、ずっと聞こえていたので、寝間着のまま外へ出て鳥を探した。電線にとまって鳴く小鳥を発見したが、遠すぎてよくわからなかった。翌日もまた朝から同じ電線で鳴いていたので、今度は双眼鏡を持ちだして観察した。下から見上げると8倍の双眼鏡の視野の中に、腹が黄色い小鳥がいる。よく通る美しいさえずりから「キビタキではないか」という予想は見事に的中した。あざやかな腹の黄橙色は雄だった。メスは全体にくすんだオリーブ色で目立たない。



キビタキ 黄鶯 (ヒタキ科)
学名: *Ficedula narcissina*
英名: Narcissus Flycatcher
体長13cm スズメよりやや小さい

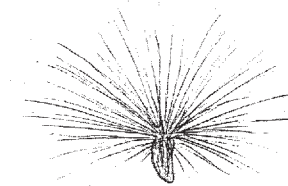
英名のナルサシス・フライキャッチャーは飛ぶ虫を捕まえるナルシスト(うめぼれ屋)の意味

メスは卵を産み育てるうえで敵に襲われないように、目立たない姿をしているのが一般的である。ではなぜオスは目立つ体色の上、自分の存在を誇示するように鳴くのか、敵に襲われる可能性が高くなるばかりである。一説には、このように目立つ状態であるにも関わらず、生き残っているのは、それだけ危険をかわす力(生きる力)が強いということであり、メスはそのような強い性質の遺伝子を持つオスを我が子のために選ぶらしい。そこでオスはメスに選んでもらえるように「こんなに美しく目立っているのに、生きてます。さすが俺。でしょっ!」とアピールしているのだという。

キビタキはヒタキ科の渡り鳥で、夏鳥として5月ごろ南方から日本に渡ってくる。北海道から沖縄まで広く見られ、夏に繁殖し、秋には東南アジアなどの暖地へ移動し冬を越す。鳴き声がきれいでよく響く、こんなに小さな身体からどうしてそんな声が出るのか不思議である。さえずりも様々なパターンがありちょっと言葉で表現しにくい、「チュルリイ、ピュリリイ、ピーピリ、ポピピー」と甲高く響く。図鑑によればオーシツツクとセミの鳴き声や、ケロロとカエルの鳴き声をまねたりもするらしい。キビタキという名は黄色いヒタキという意味だが、ヒタキというのは、この鳥の鳴き声が火打石を打つ音に似ているから「火焚き」というらしい。

このキビタキは6日ほど、家の近くの電線やナンキンハゼの梢で鳴いていた。渡りの途中で繁殖の相手のメスを探していたのだろうか。その後姿を消したのは、メスと巡り合って新しい命を育てるために、山地の森などに移っていったのかもしれない。タカなどに襲われてなければよいが……

「大変なことに…もうなってますよ!」 外来植物の侵略



綿毛



種子

アメリカオニアザミ (キク科) 学名 *Cirsium vulgare*

二見北小学校の北校舎の北側には、アザミの群落が広がっている。ピンク色のつぼみが4月の中旬には開花し、5月半ばには種が熟して綿毛を飛ばし始めた。これは全身がとげに覆われた非常にアンタッチャブルな奴らで、名前をアメリカオニアザミという。

日本にはノアザミ、オニアザミなどのアザミの仲間が自生しているが、最近このアメリカオニアザミが急激にはびこりだしている。アメリカと名がついているがもともと原産地はヨーロッパである。1960年代に北海道で見つかったが、これはアメリカから輸入された穀物や牧草などに種子が混ざって持ち込まれたと考えられる。年々分布を南に広げ、本州四国まで広がっている。私は加古川河川敷や、明石の他の場所ではまだ見えないが、二見北小学校でこの外来種の大群落に初めて遭遇し戦慄している。

手持ちの植物図鑑には記載されていないので、多くの情報はネットに頼っている。他の在来種のアザミ同様、アメリカオニアザミもキク科であり、タンポポなどと同じように綿毛のついた種子を多量に作る。広がった綿毛の直径は3cm余りもあり、種子は長さが6mmでタンポポなどより数倍大きい。風力で広域に飛び、種が落ちた場所で確実に芽吹いて子孫を増やしていくに違いない。

ブラックバスやアライグマ、ミシシッピーアカミミガメなど外国からの移入生物の多くは人為的に持ち込まれたものだが、繁殖力が旺盛で天敵がいないため、日本在来の生物の生息を脅かすほど増えており、その対策が問題になっている。アメリカオニアザミもはやく何とかしないと「大変なことになりますよ」と言いたい。とりあえず「北小の自然を守る!」と男(わたくしです)は立ち上がり、軍手をはめて綿毛になり始めた花をハサミで刈り取り始めてみたが、圧倒的な数の多さと、鋭い棘攻撃に降参し、10分でやむなく撤退となった。このノアザミを食べる昆虫もしくは草食動物が現れないのか。

これとは逆に日本からアメリカに持ち込まれて厄介がられている植物がある。乾燥地の緑化に有効と移入したが、強靱なツルを伸ばして大繁殖し、周囲を覆いつくしてしまう。それは日本でも厄介がられるクズである。かつては根のでんぷんや茎の繊維を利用し役に立っていたが、今では利用価値がなくクズ扱いのこの植物は学名もKuzuである。